

「私の憧れの人」

静岡県立伊豆総合高等学校 工業科 電気電子類型 3年

水口 結菜

私にも何か特別な強みがほしい、と思った。そんな漠然とした理由で工業の世界に飛び込み、何もかもが初めてだった。今まで車のカタログもプラモデルも見たことがない、工業とは無縁の人生を過ごしてきた私にとって、この世界は別世界だった。

電気電子類型に入ってから2年が経った。電気工事やシーケンス制御、マイコンの電子工作など数多くの実習を重ねていく中でひとつ、これがやりたいと思えるものに出会った。それは、保全の仕事だ。多くの人が、電気は生活を豊かにしてくれる便利なものだという認識を持っているだろう。しかし、その一方で危険と隣り合わせであるということをおぼえてはならないと思う。

スマートフォンやゲーム機、家電製品、電気自動車など、電気はあらゆる用途に合わせながら姿を変えている。その過程には電気を作ってくれる人、届けてくれる人、使う人、そして電気と暮らす私たちの安全を守ってくれる人がいる。その中でも私は安全な暮らしを守れる保全の仕事に興味を持った。私たちは生活の中で無意識に電気に触れ、電気を使えることが当たり前だという認識を持っている。しかし、決してそんなことはないと言断できる。コンセントの向こう側には配線などの電気工事に携わってくれている人がいる。もし停電が発生してしまったときには、雨の日も風の日も復旧工事をしてくれる人がいる。たくさんの人に支えられて生きている今日に感謝の気持ちと憧れの気持ちで心がいっぱいになった。私もこんな風になりたい、と。そこで休日に、電気関係の仕事をしている父にこの気持ちを伝えると、父はこう答えた。「ある意味、電気を使えることは当たり前だという認識は間違っていないと思う。俺たちは当たりの生活がずっと続いていくためにいる。」予想外だったけれど、私が憧れている仕事の素晴らしさをもう一度思い知らされた瞬間だった。

あと一年。この学校で電気についてまだまだ学びたいことがある。父の存在に一步でも近づきたい。いつか、自分の手で誰かの暮らしを守りたい。今日も父の言葉を胸に自分にできることを見つける。まずは、第二種電気工事士の資格取得に向け、勉強に励む。卒業式で工業科電気電子類型の卒業生として堂々と社会に飛び立てるように。作業着を着て家を出ていく父の背中がいつもより少し大きく、かっこよく見えた。